

『社会学徒』から見た第一次世界大戦後の ヴェーバー受容

— 政治・民族研究との関連から —

徳 山 弓 恵

1 マックス・ヴェーバーと日本

1.1 問題の所在

マックス・ヴェーバー (1864-1920) は社会学において古典と言える学者であると同時に、第一次世界大戦時は軍人として勤務し、終戦後軍務を退いたあと政治評論活動を展開していた事でも有名である。ヴェーバーが科学者として、ないし政治評論家として第一次世界大戦から受けた影響も、少なからずある¹⁾。日本においてヴェーバーが紹介され、盛んに研究されたのはヴェーバーの死後であるが、日本のヴェーバー受容から生まれた学的営為には、計り知れないものがある。第一次世界大戦後から政治的要素を身に着けていたヴェーバーの遺産を日本は受容し、同時に利用していった。その背景には、第一次世界大戦後の緊迫した状況が存在したのである。

本稿では、第一次世界大戦から第二次世界大戦の間、いかに日本の社会学がヴェーバーを受容し、咀嚼していったのかを、戦前に発刊された社会学専門雑誌『社会学徒』を通して明らかにしたい。

1.2 日本ヴェーバー受容史と『社会学徒』

日本におけるヴェーバー受容は明治大正の頃から細々となされてはきたが、日本の知的世界においてヴェーバーが大量に受容され、その研究が盛んに行われるようになったのはヴェーバーの死後しばらく経った1920年代半ばあたりからである (シュヴェントカー 2013)。その全体的な受容状況は、既に内田 (1990) やシュヴェントカーによって整理され、深く掘り下げられている。しかし、管見の限り本稿で紹介する『社会学徒』がヴェーバー受容において担ってきた役割については、未だ検証される余地があるように思われる。

日本大学の円谷弘が中心になって組織された同人社会学徒社によって発行された社会学専門雑誌『社会学徒』は、学術雑誌としては珍しく月刊で発行され、1927年から1944年まで世に送り出され続けた。この雑誌をヴェーバー受容という観点から見ると、ヴェーバー社会学紹介の先駆的存在となった翻訳や研究の他、第一次世界大戦を生き抜いた政治家としてのヴェーバー像の紹介、更にその後日本が巻き込まれていく第二次世界大戦に向けて変化していった日本社会学を背景に試みられたヴェーバー批判等、多彩な受容状況の一側面が把握できる。

2 第一次世界大戦後の情勢と『社会学徒』

2.1 第一次世界大戦後の世界情勢と日本社会学

1914年から1918年にかけて人類初の総力戦を経験した後の世界には、自由主義的な社会・経済政策や科学を疑問視する風潮が現れ、それに加えて1929年には世界恐慌による生活苦が市民を襲う。イタリアではファシズムが生まれ、ドイツではナチス＝ドイツが台頭した。

日本もこの風潮と無関係でいるわけにはいかなかった。二度の恐慌によって広がる社会不安を目の当たりにした日本の社会学では、これまでの理論形成を主眼においていた社会学の風潮を反省し、より現実に即した社会学を目指そうとする声が出るようになる²⁾。その上、世界は時代とともに第二次世界大戦という次の総力戦を控えた逼迫した状況に進んでいく。このような現実的実践性をもとめる風潮は、イタリアとドイツに続く日本の全体主義化を推し進める、ひとつの理論的根拠として利用される立場にあった。帝国政府による権力的圧力によって他のリベラルな議論が論壇から抹殺されていく間、社会学という学問領域自体が政治的イデオロギーに包摂されていく。

2.2 『社会学徒』とヴェーバー——その時代による変遷——

日本大学関係者が編集の中心になっているとはいえ、『社会学徒』の執筆陣は幅広かった。これは、円谷弘の人脈によるものが大きいと思われる。大学や派閥を問わず多くの投稿が寄せられていた『社会学徒』からは、このような日本社会学の歴史的流れが生々しくうかがえる。創刊当初こそ、第一次世界大戦の爪痕をひきずった欧州事情の報告に加えリベラルな風潮が残っていたが、それらは徐々に払拭され、ファシズムやプロパガ

ンダの研究、民族研究、戦時動員といった研究が目立つようになる。最終的に日中戦争勃発を契機に、台湾や中国大陸、大東亜共栄圏構想をもとにした社会構想等、政治色が強いものとなる。

このような時代の変遷を経験した『社会学徒』において、ヴェーバー受容は絶えず変化しながら受容されていった。

3 『社会学徒』におけるヴェーバー受容

本稿では便宜的に、『社会学徒』における受容を以下の4つに分類して紹介したい。

1. ヴェーバー社会学の紹介・研究
2. 政治的ヴェーバー像の報告
3. ヴェーバー批判
4. ヴェーバー社会学の応用

3.1 ヴェーバー社会学の研究・紹介

ここでいう「受容」は一般的にオーソドックスなヴェーバー受容イメージに近い。主に発刊当初の1927年から1931年にかけて目立つ傾向である。まだその頃やっと開拓されはじめていたヴェーバーを、日本史上初の翻訳という形で紹介していった小松堅太郎、坂田太郎の功績が挙げられる。

小松は社会学の学問的位置づけと、とるべき方法論のヒントとしてヴェーバー理論を受容している。「科学の二大別に就いてマクス・ヴェーバーは大体自然科学対文化科学の区別を認めている」(小松 1927:9)とあるように社会学の学問的立ち位置から入り、ヴェーバー社会学の根本概念である理念型を、リッカート、オッペンハイマー、ワルターの見解と比較しつつ詳細に考察し、社会学の基礎的位置づけについて見解を述べている。また、ヴェーバーの *Wirtschaft und Gesellschaft* (経済と社会) の中の一節 *Soziologische Grundbegriffe* (社会学の根本概念) の翻訳が未完ながらも3回にわたって掲載されている。

小松は事細かに訳註でもってヴェーバーの論文、特に *Idealtypus* (理念型) について補足している。以下、訳文を引用する。なお、引用の下線部は、全て筆者が注目すべき個所として引いた。

緒言、此の（註）序論的に述べる所の、而も全く欠くことの出来ぬ、それでいて必然に抽象的で従って現実の世界よりかけ離れたゞ或仕事を営む概念の規定の方法（註）は決して新しいものではない。反対に此の方法は、凡ゆる経験的社会学が、（吾々と）同一の事柄について語ろうとする時に事実上意味する所のものを、たゞ目的適合的な且つ幾分正確な（或いは恐らく術学的に聞えるであろうが）表現の仕方でも明示することだけを求むるに過ぎない。此の事は表面だけは余り見慣れぬ又は新奇な言葉が用いられる時でも同じである。ロゴス第4巻（1913年、253頁以下）に載っている論文と違って術語はできるだけ簡単にし、亦出来得る限り容易に理解の出来るようにするために屢々それを変更した。勿論かような無条件的通俗化への要求は概念の鋭さを最も大きくしようとする要求と常に一致するものではないから或場合には之を避けなければならぬこともあろう。

（註）（註は訳者が勝手に用いるもので原文にはない。詳しくは訳者註曰とでもすればいいのであるが）。此のと云うのは緒言か終ると直ぐそれに続く社会学的根本概念の定義を指すのである。

（註）現実の世界より離れて特定の仕事を営む概念と云うのはマクス・ヴェーバー独特の概念構成の仕方であって、後に述べる理想型の事を指すのである。（Weber1922 = 1928a : 21）

更に小松は第一節第一項の方法論的原理の項においても、特に Idealtypus 概念の理解を促すために、日本軍人の愛国思想を事例にして説明を試みている。

（1）茲に云う所の「意味」とは或いは（甲）事実上（イ）歴史的に与えられた場合に於て行為者から主観的に思われたる意味又は（ロ）与えられたる一団の場合に於て平均的に而して近邇的に行為者から思われたる意味であるか或いは（乙）概念的に構成せられたる純型に於て類型として思惟的に形成せられたる行為者（単又は複）から主観的に思念せられたる意味である（註）。（故にそれは）或客観的に「正当なる」意味又は形而上学的に構成せられたる「真正なる」意味ではない。此の点に社会学及び歴史の如き行為に関する経験科学が法律学、論理学、美学の如き、其の研究対象に就いて「正しき」（又は）「妥当

なる」意味を究明しようとする凡ゆる条理科学（註）に対して、有する区別が存する。

（註）意味の3つの区別の例は次のようなものである。

（甲）の（イ）は歴史に現われたる特定の人物が特定の時所に於て特定の事件に就き思念したる意味に当る。例えば某将軍が或事に就て思える意味。（ロ）は例えば某地点に屯集せる1軍団の士卒が忠君愛国の思想に関して抱ける意味思念が夫々程度を異にする場合、其の凡てに平均せる思想に意味思念の量を全部合算したる上それを士卒の全数にて割るときに得られる。然るに（乙）の場合に於ては斯かる平均的なる意味思念を得る事を目的としない。人々が日本の軍人は忠君愛国の思想に富むと云う場合、それは決して各士卒全体に行き互れる平均的なる愛国感情を意味しないで、寧ろもっとも高調に達していると見らるべき思想の一面的高昇に基いて日本軍人は云々と云うのである。故に実際には甚だ愛国的ならざる軍人の在る事も事実であろう。要するに此の場合は大和武士と云うが如き理想的類型として思想上構成せられたる行為者が純真なる愛国心を抱く事の一方的高調に外ならぬ。（Weber1922 = 1928a : 22）

ここからわかるのは、日本の社会学におけるヴェーバー受容がまだ途上であり、ヴェーバー社会学の概念の説明に徹する小松の姿勢である。「（註b）「それ」と云うのは合理的に構想せられたる行為即ち合理的目的のために全く理知的に打算的に選択せらるゝものとして構成せられたる手段の關係を云う。現実の行為と比較せらるゝ立場にある行為。」（Weber 1922 = 1928b : 33-34）と、小松はIdealtypusがあくまで分析のために意図的に作り出された概念であることを事細かに説明している。

一方、Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologieを坂田が4回にわたって訳した「理解社会学の若干の範疇に就いて」において、坂田が著した『社会学的方法的原理』（1930）における訳を巡った議論が載っている。以下に訳者付記を引用する。

訳者附記——昨年度9月から号から本号に亘って連載された此の訳稿は一昨年手をつけたまゝの未定稿である。訳語についても訳文についても現在では不満を感じている箇所が多々あるが、身の事情に煩

わされて充分推敲の出来なかったことを残念に思う。此の点で先輩諸氏の御教示を仰ぐことが出来れば節者の幸福これに過ぎたるものはない。それから昨年四月同じ著者の「社会学的方法的原理」を訳出刊行した折、関栄吉氏が「一橋新聞」昭和4年6月23日号で紹介の労をとられた傍ら色々有益な批評を下されたのに対し訳者は深く同氏のご厚情に感銘を受けたが、その説訳者に解答を求められた件につき遅まきながら茲で御答えしようと思う。同氏は訳者がIdealtypusを「理想型」と訳していることに対して「Idealtypus」は理念型が普通である。またその意味は「価値的理想」の意味ではなくしてlogical consequenceの意味だから「理念型」の方がよくなるかと思う」と批評され「尤も訳者に十分な根拠があってなされたことも知れない。それなら此の機会にこの点についてご教示を得たい」と訳者が理想型の訳語を使用した論拠を問われる。成程Idealtypusが価値的理想でなくlogical consequenceの意味であることは周知の事実であり、またウエーベルも明白にIdealtypusはイデー（理念）であるといっていることからして理念型と訳すことの論拠を示されるのであろう。しかしイデーを理念、イデアルを理想と訳すことは日本学界の常識となっており、且つイデアルが形容詞として用いられているのではない以上（同訳書原文521頁参照。尚イデーの形容詞としてなら寧ろideellが用いられるべきだと思う）理想型と訳す方が訳語として忠実だと思われる。のみならず第二にIdealtypusはウエーベルも云っているように一箇のウトピーを示し論理的理想を表わしているのであるから矢張り理想型とする方がよいのではないかと考えられる。（Weber1913＝坂田1931：34）

今日では「理念型」と訳される事が一般的となったIdealtypusであるが、この附記は訳語に関する議論が白熱していた当時を伝えている。二人の翻訳は既にヴェーバー受容初期に発表され、この功績からヴェーバーの理論を広める啓蒙的役割を社会学が担ったとヴェーバー受容史上評価されている（内田 1990）。訳語の論争の場の一端となっている様子が見受けられる事から、『社会学徒』がヴェーバー理論の浸透に寄与している点は意義深い。

3.2 政治的ヴェーバー像の報告

第一次世界大戦で従軍したヴェーバーが、その後多くの政治的活動に参加していった事は有名である。ヴェーバーの政治的関心について、当時ヴェーバーの同僚だったハイデルベルク大学のシュルツェ・ゲーヴァニッツの“Max Weber als Nationalökonom und Politiker, Erinnerungsgabe für Max Weber” (1923) が、ヴェーバーの死後ヴェーバー記念論文集に所収されている。池田三郎によって2回にわたって翻訳された「経済学者及び政治家としてのマックス・ヴェーバー」は、ヴェーバーと同時代を生きたドイツ人によるヴェーバーへの言及が読み取れる貴重な史料である。

彼が語るヴェーバーからは、当然ではあるがリアリティと、当時第一次世界大戦で敗戦国となったドイツの時代状況が窺える。

1920年、マックス・ウエバアの死によって、独逸の経済学が、その最も偉大なる人を失えることは、悲しみに耐えない。マックス・ウエバアは単なる学者たるのみではなかった。彼は一流の政治的指導者であった。而して戦敗独逸の没落からの唯一つの救い路は外国に対する勢力政策の基礎たる国内の民主化であることを夙に認めていた。1895年フライブルヒに於ける大学教授就任演説「国家と経済政策」にこの傾向が現れている。晩年に於けるマックス・ウエバアは単なる学者政治家を超越して現代独逸に希有の、吾が古典学者的な偉大な、世界を抱擁する人格者であった。(Gaevernitz 1923 = 1928a : 13)

ゲーヴァニッツ自身は自由主義的立場を取っていたが、彼のリベラリストとしての姿勢が、アメリカとヴェーバーを関連づけて論じている部分に影響しているように思われる。

更に興味深いのは、ゲーヴァニッツの言及は学問上としてだけではなくヴェーバーの研究の政治的意義についてもなされていることである。そこには、第一次世界大戦における敗戦を経験した当時のドイツ人の状況が鑑みられる。

悲しい哉、ウエバアの有せるアングロサクソンの民族心に関する異常なる識見は大戦前も大戦争中も、政治上の目的には何等の訳にも立てられなかった。ウエバアはかの宗教的に培われた自由思想が英国殊

に米国において吾々に向けて活動せしめられることが何を意味するかを知った。彼は同盟軍との戦を破局と観念した、彼は一九一六年始私に書いてよこした。「潜航艇論者の煽動に対しては暴力で干渉しなくてはならない。然らざれば我が王国たる所以が分らない。」マックス・ヴェーバーの言は聴かれなかった。暗を彷徨している独逸政府はこの天才の光を軽んじたのである。

彼は戦争中不本意ながら与えられた閑暇をその宗教的倫理的経済研究の建設に利用した。その結果は彼の出版する「社会科学研究」録中の広汎な緒論文—「世界宗教の経済倫理」である。(Gaevernitz 1923 = 1928a : 16)

潜航艇論者とは、第一次世界大戦においてドイツ帝国が敢行した無制限潜水艦作戦を支持する論者を指し、無制限潜水艦作戦とは、潜水艦でもって敵国に係る艦艇や船舶を無警告で無差別に攻撃することである。当時ヴェーバーはこの作戦の強化に反対する覚書を政府に送っていた。論文の終盤ゲーヴァニッツは「世界戦争の結果、マックス・ウエバーは不可避的デモクラシーに自発的に門戸を解放すべきことを明かに観念した。それは筆者も同様であった」(Gaevernitz 1923 = 1928b : 23) と回顧している。ここから、第一次世界大戦時のドイツ帝国の行方を気にかけて、民主主義を志向するヴェーバー像が池田の翻訳によって発表されたのではなからうか。

The Sociological Review に載せられたファルクによる“Democracy and Capitalism in Max Weber’s Sociology” が、馬場明男によって「マックス・ウェーバー社会学に於ける民主主義と資本主義」として翻訳されたという事実は、管見の及ぶ限り先行研究にも触れられていなかったので注目に値する。この論文では表題の通り、ヴェーバーの政治的側面を紹介している。

ウエバー及ホツプハウスは同じ大戦前の時代に活躍した人である。即ち両者とも純然たる科学的関心と熱情的な政治的関心とを結合させたのだった。両者とも究極的には実際的問題に関心を導かれた、即ち自由主義的デモクラシーを可能ならしめたものは人間性及歴史的発達に於いては何か？ 現在如何なる危険が其れを脅威するののか？ おそらくウエバーはマルクスを除いては社会学者の中で最も鋭く政治問題に関心を抱いた者であろう。彼れは目的を挫かれた政治家であった。独乙

のデモクラシーの時期が独乙帝国の瓦解後に到来した時、友人達は彼れを未来の大統領と仮想した。併し彼れの神経病と政治的妥協を生れつき嫌う心情は学問的な経歴から一步も進展することを許さなかつた。加うるに、1918年以前には政治的確信を抱いていたのは彼れ及若干の友達だけであつて、戦前の独逸には自由主義的デモクラシーへの大衆運動は皆無であつた。ワイマール共和国が発生したのは自治にたいしての中産階級の争闘からでなくむしろ旧制度の解体からであつた。それ故、ウエバーは特に自由主義的デモクラシーの確立を邪魔した障害を憂慮した。彼れに関し何か論文を書くことは同時に独乙デモクラシーと今日のデモクラシーの危機の不幸なる運命を書くことになる。(Falk 1935 = 1936 : 1-2)

上記の引用以降は、ヴェーバーの当時のドイツ政治における行動の分析、ロシア革命に関する諸考察をしてきた経歴を紹介している。更にファルクはヴェーバーの言質を借りて、第一次世界大戦後からナチスによって換骨奪胎されるまでの、ワイマール共和国時代のデモクラシーの結末について考察する。

ドイツにおけるデモクラシーはビスマルク時代の政策や、第一次世界大戦後のワイマール共和国時代にまで続く階級間闘争によって芳しく進まなかつた。結局ファルクは、ドイツにおけるデモクラシーはウエバーの信念を裏切り失敗に終わったと締めくくる。ファルクは当時この論文を書いた1935年——ヒトラーがヴェルサイユ条約を破棄し、ナチス・ドイツの再軍備を宣言した年である——当時の民主主義の危機的状況を危惧している。

1923年のシュルツェ＝ゲーヴァニッツの池田訳も、1935年のファルクの馬場訳も共にヴェーバーの民主主義に関する論考である。しかし、前者は個人への追悼の意もあるが、どちらかという過去への憧憬が込められているのに対し、後者は今現在の世界情勢への危機感を募らせている。その間10年あまりの間に社会情勢が一気に緊縛した事が、このヴェーバー受容を担う翻訳日本を比較することで理解できる。

3.3 ヴェーバー批判

ファルクが論文を書いた1935年に、日本では天皇機関説を唱えた美濃部達吉が反国体的であると糾弾される事件が起き、馬場が翻訳したその1

年後には日中戦争が勃発していた。このような緊張下にある学界で、先述した現実的实践性を帯びた社会学を志向した日本社会学の風潮は、次第に民族研究や全体主義研究等、政治的課題を切り抜ける使命を帯び始めていた。

一方、日本ではヴェーバーが生んだ概念を学問の自律性を守る砦として受容されていた動きがあった。Wertfreiheitは、科学者は実践的な価値判断を一切入れず事実のみを研究していくべきであるという概念「没価値性」として解釈されてきていた³⁾。

『社会学徒』の戦時色が濃くなる中で、この「没価値性」を批判しようと試みた人物がいる。

湯村は当時、日本が大陸に進出するアジア情勢の中で、日本独自の統合原理を持った社会を構想する日本主義社会学に没頭していた。現実社会において実践的価値判断をもって民族共同体を志向していた湯村にとって、研究に自らの価値判断を持ち込むことを禁じる「没価値性」は、対峙せざるをえない概念だった。

科学は純粹に理論の分野を守るべきであって、実践的価値判断に関係する事は許されぬと云う没価値性の思想は、マックス・ウエーバーに依って輝かしくも展開された。実践的評価にあっては能動的意欲的に自らの関心し希望する側面のみが前面に表れ、この故に現実に対する静観的關係は破壊され、視野は局限され場合に依ってはまた激しい感情等に依って科学的意識は曇らされ明晰をみだされる。真理は覆われる。かくの如きは經驗科学の課題圏から排除されねばならない。知識に属する「認識」と、信仰に属する「評価」とは判然たる区別をしなければならぬ。かくて理論と実践とをもっとも明確に分離した彼は「没価値性」の概念を、エネルギーに押し出す事に依って科学の客観性、自律性、無前提性を擁護せんとしたのである。(湯村 1937 : 21)

しかし湯村は、「理論と実践との分離に関する」(湯村 1937 : 26) ヴェーバーの「没価値性」もまた、ヴェーバーが生きた時代の上になり立っていると述べる。

われ々は一般的に云って研究態度と言われるもの、就中、社会諸科学の研究態度が、純理論的又は純科学的と断われているにも拘らず、それが等しく根源的には現実の生活実践の態度の一つに他ならないことを知っている。如何なる理論構成と雖も、それが如何に観念的又は論理的にふる舞う共、事實は必ずそれ自身、この理論構成を行うひとの現実の社会生活に依って自然的に規定され制約を受けるのである。教授は今日、極端に迄発達した分業の結果直接には何等社会的生産に従事して、自然に対して官性的労働なる仕方に於て交渉して居るものではなく所謂イデオロギー的生活過程の享受者として観想性はその本質的性格である。ヴェーバーの思想はこの様に構成された生活領域にこそ、其発生の由来を持つ。没価値性理論は不純な実践的意図の混入を排し、純粹理論科学の樹立を目指して出発すると云う観想的態度を以て現われた。然し乍らひとは非実践的非政治的なる態度を取り凡ゆる党派に超越せる事自身の中に却って紛う方なき一つの実践的性格を看過してはならない。(湯村 1937：26-27)

続けて湯村は、「ヴェーバー自身世界観の前提より離れよ、と云う一定の特色ある世界観の上に立つものである」(湯村 1937：27)として、その生活における世界観の中でヴェーバーを考察する。

ヴェーバーの生を享けたのは1864年より1920年に至る。正に近代資本主義社会の飛躍的發展、繁栄、完成の歴史的段階である。個人主義、自由主義の黄金時代であり支配的であったエポックに該当する。神学的精神や形而上学的思弁に対する自然科学的合理主義の輝ける勝利を祝福せる時代である。されば没価値性とは情意的根底からの理性の解放であり具体的には封建的イデオロギーより個人主義的市民的、合理性を解放せんとする要求の理論的表現をなすものであったのである。(湯村 1937：27-28)

湯村が行った「没価値性」批判からは、個人主義と自由主義が栄えた黄金時代の、偉大ではあるが、自分が置かれた現実と自ら目指した民族的世界観のために乗り越えなければならない超克すべきものとしての「没価値性」が浮かび上がってくる。更に、湯村の世界観研究では、そもそも「没

価値性」もまた、過去の自由主義的時代の世界観の上に成り立っているのだと反論している。だからこそ、今の民族主義と全体主義が席卷している日本においては「没価値性理論は、ひとの欲すると否とに拘らず客観的に淘汰さるべき歴史的運命にありと云わざるを得ない」ものであるとしている（湯村 1937：30-31）。

3.4 ヴェーバー社会学の応用

第一次世界大戦後、二度の恐慌によって経済的に大打撃を受けた日本は、大陸開拓に希望を見出していき、無論それには大陸文化や国家の包摂と排除が伴った。大東亜共栄圏が日本中で叫ばれている中で、当時の社会学者たちにとって中国やインド等、アジアを研究する事は目下急務であった。その学者使命を意識してアジアの資本主義や宗教研究に乗り出した学者からすれば、ヴェーバー社会学を道しるべにしてアジア研究をすることは急務であった。その意味でヴェーバーから多大な影響を受けた人間としては、羽仁五郎があげられる（シュヴェントカー 2013）が、『社会学徒』においてはヴェーバーのインド研究をヒントにした学者が登場する。

『社会学徒』が6号を最後に廃刊となった18巻でヴェーバーの名が出てくるのは馬場明男（1944）の論文であるが、そこでは当時議論されていたウィットフォーゲルが述べるアジア的停滞性について考察されている。アジア的停滞は社会的に統一された日本には見受けられないという秋沢修二の理論を挙げ、なぜ他のアジア諸国はそれぞれ統一されえなかったのかという疑問に至る。そこで馬場はカースト制度に注目し、インドの国民統一が成されなかった原因を探求する。オルデンベルクによるバラモンの宗教観念に関する考察を受けて馬場は、以下のように考察する。

こうした宗教観念に土培われたインド教が多年に亘ってインド社会と文化を指導したことはインドの政治組織の脆弱性を醸成したといえるであろう。その問題は宗教観念が社会生活を規定するというマクス・ヴェーバー的宗教社会学を可能ならしめる。（馬場 1944a：5）

インドの文化を規定する要因のひとつとして、馬場はカースト制度の考察に入る。ここでもヴェーバーの宗教社会学を利用している。

カーストはヤチュール・ヴェーダやブラーフmana時代に印度の社会制度になったとする見解が比較的多い。例えば井原徹氏も「ヤチュール・ヴェーダやブラーフmanaの時代に至れば四姓と呼ばれる制度が血族や皮膚の色と直接的な関係を離れて定められ、茲に印度社会制度ができた」(印度教407頁)といている。マクス・ヴェーバーもカースト組織が完全に発達したのはこのブラーフmana時代と云っている。(馬場 1944b : 17-18)

その後、馬場はインド社会の停滞性はカースト制度による社会の分裂、それを支える形となった宗教によって強化されたと述べ、冒頭で触れていたアジアの停滞性が日本を除いてインドや中国社会にある程度適用されると結論づけている。

このように馬場の論文では、ウィットフォーゲルを代表するアジアの停滞性をめぐる議論の中で、ヴェーバーが部分的に応用されている。

4 総括

以上、『社会学徒』のヴェーバー受容の一部を紹介した。『社会学徒』は日本のヴェーバー受容の最初期とも言える時期に、ヴェーバーの著作の翻訳と研究を提供することでヴェーバー受容に寄与し、第一次世界大戦の最中とその後のドイツの政治に積極的にコミットしていくヴェーバー像が、ヴェーバーの同僚や海外の研究者の論文の翻訳という形で紹介された。特に『社会学徒』の中では、民主主義者ヴェーバーの像を浮き彫りにしていた。その後、第一次世界大戦後の大恐慌をきっかけに逼迫していく世界情勢の中で、ヴェーバーは論者それぞれの自論の中で批判され、あるいは日本のアジア研究に応用されていったのである。論者の研究は、日本の政治的イデオロギーに包摂されてしまったという背景を持つ研究ではあるが、日本人研究者による民族研究の中で、ヴェーバーの「没価値性」や宗教社会学研究が受容され、咀嚼されていった様子が明らかとなった。

この論稿を通して、ヴェーバー受容が第一次世界大戦以降の時代背景と日本の状況と複雑に絡み合った多彩な側面を持っていることを紹介できれば幸いである。

注

- 1) 例として、ヴェーバーの国家観が第一次世界大戦を通して変化していった旨を考察している内藤 (2000a, 2000b) を参照されたい。
- 2) ジンメル形式社会学を下地に、社会関係を通して社会を観察する高田保馬の立場が、昭和の恐慌以降急速に力を失っていったのは、日本社会学史上言及される事が多い。高田社会学を現実遊離の社会学として批判し、より現実社会に還元できる社会学を目指す向きが昭和の始めに勃興した。知識社会学の立場から、この危機の時代における社会学の使命を論じた樺敏雄、坂田太郎らが中心になって立ち上げた社会学研究会がわかりやすい例である (河村 1973)。
- 3) この解釈は、戦後安藤英治によって批判される。科学者は客観的事実の探求をしようと思っても、結局自らの価値評価から逃れることはできない。むしろ学者自身はそれを自覚し、それに囚われぬように意識する態度こそがヴェーバーの Wertfreiheit であり、現在は「価値自由」として一般的に訳されている。

参考文献

- 秋元律郎, 1975, 『日本社会学史——形成過程と思想構造』, 早稲田大学出版部。
- 馬場明男, 1944a, 「印度社会の分裂と統一 (1) —特にカーストに關係して—」『社会学徒』18 (4) : 2-11.
- , 1944b, 「印度社会の分裂と統一 (2) —特にカーストに關係して—」『社会学徒』18 (5) : 14-28.
- Falk, Werner, 1935, Democracy and Capitalism in Max Weber's Sociology, *The Sociological Review*, 27 (4) : 373-393. (=1936, 馬場明男訳「マックス・ウェーバー社会学に於ける民主主義と資本主義」『社会学徒』10 (6) : 1-15.)
- 河村 望, 1973, 『日本社会学史研究』(上), 人間の科学社。
- 小松堅太郎, 1927, 「理念型概念に就いて」『社会学徒』1 (4) : 9-14.
- Schulze-Gaevernitz, v, G, 1923, *Max Weber als Nationalökonom und Politiker, Erinnerungsgabe für Max Weber*. (=1928a, 池田三郎訳「経済学者及び政治家としてのマックス・ウェーバー」『社会学徒』2 (3) : 12-16.)
- , 1923, *Max Weber als Nationalökonom und Politiker, Erinnerungsgabe für Max Weber*. (=1928b, 池田三郎訳「経済学者及び政治家としてのマックス・ウェーバー」『社会学徒』2 (4) : 19-25.)

- シュヴェントカー, ヴォルフガング, 2013, 『マックス・ウェーバーの日本——受容史の研究 1905-1995——』, みすず書房.
- 内田芳明, 1990, 『ウェーバー研究と文化のトポロジー』リポート.
- 内藤葉子, 2000a, 「マックス・ヴェーバーにおける国家観の変化 (1) 暴力と無暴力の狭間」『法学雑誌』47 (1) : 116-158.
- , 2000b, 「マックス・ヴェーバーにおける国家観の変化 (2・完) 暴力と無暴力の狭間」『法学雑誌』47 (2) : 340-365.
- Weber, Max, 1913, *Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie*. (=1930a, 坂田太郎訳「理解社会学の若干の範疇に就いて—Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie— (1)」『社会学徒』4 (9) : 17-28.)
- , 1913, *Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie*, (=1930b, 坂田太郎訳「理解社会学の若干の範疇に就いて—Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie— (2)」『社会学徒』4 (10) : 30-39.)
- , 1913, *Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie*. (=1930c, 坂田太郎訳「理解社会学の若干の範疇に就いて—Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie— (3)」『社会学徒』4 (11) : 23-39.)
- , 1913, *Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie*, (=1931, 坂田太郎訳「理解社会学の若干の範疇に就いて—Über einige Kategorien der Verstehenden Soziologie— (4・完)」『社会学徒』5 (1) : 22-34.)
- Weber, Max, 1922, *Wirtschaft und Gesellschaft*. (=1928a, 小松堅太郎訳「社会学的根本概念」『社会学徒』2 (5) : 21-22.)
- , 1922, *Wirtschaft und Gesellschaft*. (=1928b, 小松堅太郎訳「社会学的根本概念 (2)」『社会学徒』2 (6) : 31-34.)
- , 1922, *Wirtschaft und Gesellschaft*. (=1928c, 小松堅太郎訳「社会学的根本概念 (3)」『社会学徒』2 (7) : 13-15.)
- 湯村栄一, 1937, 「世界観の諸問題 (2) —世界観の社会学—」『社会学徒』11 (7) : 19-31.
- , 1938, 「新刊紹介 マックス・ウェーバー著 戸田武雄訳社会科学与價値判断の諸問題」『社会学徒』12 (2) : 48-50.